

二つの保育形態を体験して

——保育者として思うこと——

高橋 陽子

この数か月、マスメディアを賑わせてる宗教関連のニュースの中で、この施設で生活している子どもたちへのインタビューや実態調査で明らかになってきたことを耳にし、初めは憤りのみを感じていたが、ふと、どんな形であれ、子どもたちは皆、選択できない社会で生活し始めることに気付いた。強いて言えば、親を選べない——どんな育て方をされるか、住む場所を選べない——国に始まり、地域、住居、など様々な環境がある中で一つだけ背負って生まれ出る。そこで教育というものが必

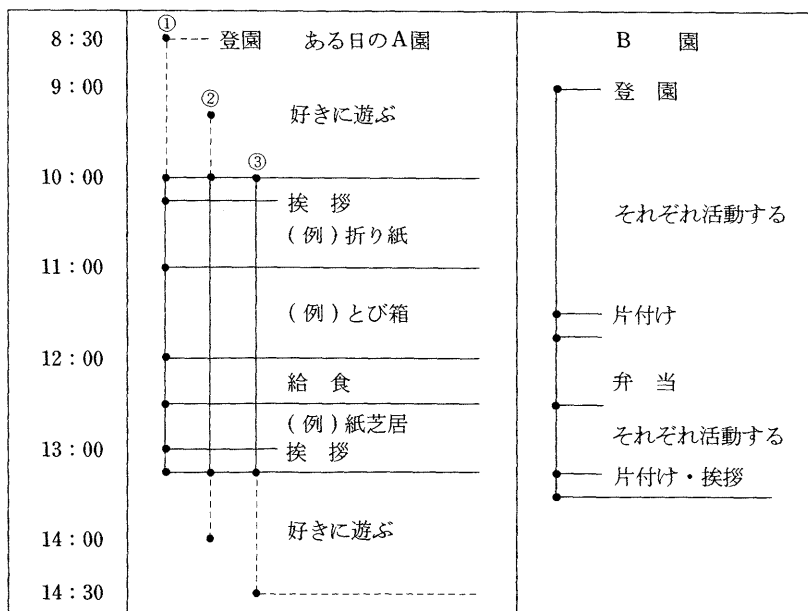
要となり、人格を形成する重要な位置を占めることになる。ところが、先の宗教団体の施設のような場で教育されたものと、そうでないものとの間に、大きな違いがあるように、どこでどんな人に、どのような形で教育を受けるかによって、教育のめざすものは同じでも、子どもたちに与える影響は変化するのではないか、と思った。どの教育の場も、子どものために最良のことを考え、実践しているし、どの親も自分の子どもに最適の環境を選択する努力を怠らない。

さて、私は研究者ではないし、深い知識があるわけではなく、幼稚園の教諭という立場にいる一人である。ただ、分と形態の違う二つの幼稚園を体験したので、大部分の子どもたちがはじめて経験する集団生活の場である幼稚園が、子どもに対する思いは同じでも地域や園の方針によって方法は色々あることを、お伝えしたいと思う。

A園は新興住宅街の中にあり、一台のバスが三廻りし園児をあらゆるこちらから乗せてくる。徒歩通園児も何人かいる。年少一、年中・長各四クラス、三百名程の私立の幼稚園である。

B園は大学のキャンパス内にあり、保護者つき添いで、電車、バスを利用したり、徒歩で通園して来る。年少・中・長各二クラスずつ、百七十名程の国立の園である。

一日の流れを見てみると、A園とB園の一番大きな違いは、何をするか決められているか否かである。A園は午前中二つ、午後一つのカリキュラムをこなしている。



一般に一斉と呼ばれる活動で、子どもたちはクラス全員で一人の担任の指示を聞いて活動する。B園の子どもたちは登園すると自分自身で活動を見つけて取り組むのである。年少児で見ると、「電車で遊ぶぞ」と決めてきた子ども、「外で遊ぶほう」と部屋に入っすぐ思った子ども、とりあえず金魚に餌をあげて時間を過ごす子ども、先生の洋服をしっかりと握ってずつついて回る子ども、千差万別である。

A園での好きな遊びは、保育室か園庭かは先生の判断で決まっているが、保育室では、ブロックやままごと、粘土などして自由に遊んでいる。そして全員が揃うと、おはようの歌を歌い、一斉の活動に入っていく。

先生の立場でいうと、A園もB園もそれぞれ難しい。A園では、三年間違う環境で育ってきた三十人強の子どもたち全体に話しても、一人一人の子が自分のものとして話を聞いてもらえる様に早い時期にしていく難しさがあり、B園では、二十人の違う子どもたち一人一人を理解し援助し、伝えるべきことは伝えていかねばならない

難しさである。一斉保育でも自由保育でも、一人一人と向かい合うことは同じでなくてはならないはずが、一日の過ごし方が違うことよって、一斉保育では全体の中の一人であって、全体を^{プラス}の方向にするために一人一人を援助する形になる。例えば、折り紙でうさぎを折ることにする。先生は大きな紙を持って黒板の前に立ち、子どもたちは六人がけの机に折り紙をおいて先生が折るのを見て折っていく。見てわかる人もいれば、「できない」と泣く人もいる。折れた人は、折れない人が先生に直接教えてもらう間待つ。できない苦勞、ずっと座って待つ苦勞をしても、どの子どもでもできあがると大変喜ぶ。先生も全員が何とか折りあげたことが嬉しい。

とび箱をする時間になると全員外に出てまずは準備体操をする。それからとび箱をはさんで男女向き合うように一列ずつに座り、自分の順番を待つ。内容としては、跳ぶことよりなれることにねらいをおいて、台にあがって、ピョーンととびおいて、好きなポーズをしたりする。年長になつてとび越すようになってきて、中には

お尻がついてしまう人もいる。何人かがお尻をおしてあげたり、「がんばれ」と応援してあげる。思わず「優しい気持ちがあったな」と嬉しく思ったりする。

殆どの時、先生が子どもたち全員に話をするため、興味のもてるような話し方をしたり、手あそびで注意を引いたり、ピアノで合図することもある。時には大きな声で強い口調になることもある。そうすると入園して何日もたたないで、たいていは園の流れにのって活動するようになる(初めから部屋に机が出してあり、ここがあなたの場所ですよ、と決められていることも関係するが)。そして早い時期に、今は遊ぶ時間、今は話を聞く時間、今は片付ける時間、と自分たちでわかるし、外で全年学そろって園長先生の話を聞くお集まりでは、整列して静かに話を聞き、最後は行進曲に合わせて園庭を一周して靴箱に帰るようになる。

もう少し経つと、フルーツバスケットやイスとりゲーム、戸外ではねずみと猫のゲームを大勢で楽しむようになる。

全員で同じことを同じ様にできるようにになると、先生としては余裕が出て楽しいし、子どもたちも真剣だったり、いきいきと楽しそうだったり、色々な表情をみせてくれる。その表情が励みとなって、これからどうしていいこう、などと全体に対しての目標をもっていく。

子どもの立場で考えると、絵を描くのが苦手で、遠足や運動会といった行事の次の日には必ず画用紙に絵を描く時間があるので、「今日は嫌だな」と思い登園する人もいるが、その時間になるとクレヨンを持たざるを得ない現状もあるように、得意なこと、不得意なこと、楽しいこと、つまらないこと、様々ではあるが、広く色々な経験ができ、話を集中して聞こうとする気持ちが身につくかを決まっている楽しさもあるだろう。

B園ではどうだろう。殆んど何をしても良いし、どこに行ってもいいのは結構だが、何をしようかなかなか決まらない人には、好きに使ってよい二時間なり三時間が負担になるかもしれない。入園してしばらくは、先に述べたように、すぐ遊び出す人もいれば何となく回りの様

子を窺って過ごす人もいる。

帰りの片付けも大変である。早く帰りたい人は丸く並べられたイスにさっと座るし、まだまだ遊び足りない人は、「片付けよ」のことに「もっと遊びたい」と泣く。一度片付いた遊具をまたばらまく。部屋から逃げ出す。色々な形で抵抗してくる。それに対して先生はどうしてくるかな、と探っているかのようにも思える。「片付けよ」から親に引き渡すまでに三十分以上になる。一人一人違う行動をとる子どもたちに、先生は一人一人ことばをかけていく。とても長い期間をかけて園の流れをわかってもらい、「先生は今こういう気持ちでいるのよ、あなたはどうか？」と通じ合っていく。二十人二十様の生活をしている中で、先生は全員に同じように穏やかにはいかない時が多々あるし、難しい。

それとともに、子どもたちにしてみても、今までとは全く異なる場所で、「ああしなさい、こうしなさい、ダメ、いけません」とも殆ど言われず、放り出された感じで大変だろう。

Kちゃんは、入園当初は、いつも「本を読んで」と言い、先生にくっついて歩いてきた。お花を作っている人を見れば、「私も作る」と言い、セーラームーンのスティックを持っている子がいれば、「私も欲しい」と言い、なかなか自分自身でこれがやりたい、という強い気持ちが出せないでいた。そんなまま三学期が始まったある日のこと、お店やさんごっこをする台の上に、Kちゃんともう一人の女の子二人であがっていた。そこへ別の女の子がきて、Kちゃんをおろそうとひっぱった時、「いやだ」といって大泣きした。そばにいた私は、やっとならば自分の気持ちを外に向かって出すことのできたのね、と嬉しく思った。

Nくんは、自分のしたいことがはっきり決まっています、常に何かに熱中していた。汽車で遊んでいると、他の子が近づいただけで、「来るな」と怒り出したり、砂場では、頭から服まで砂に埋まって靴なんか脱げていて、全身砂まみれでも黙々と遊び続けている。自分の思いは外に出せても、なかなか人のいうことは届いていか

なかった。ある日のこと、Nくんが、両手いっぱいぬれた砂を持って、部屋から園庭に出るドアのところに来た。と、ガラス戸に砂を塗り始めたのである。アラッと
思い、最後まで見届けてから、「困ったわね。ピカピカになるように、一緒におそうじしましょうか」と雑巾を渡すと、せっせと拭いて、彼なりに雑巾を洗って返してくれた。私の気持ちを通じたのかもしれないわ、と嬉しく思った。

形態に大きな違いがあることで、経験する内容に差があったり、どういう点で楽しかったり嬉しかったり、困難さを感じるかにも多少の違いがあっても、たくさんの人にふれ合って、気持ちを出しあったりわかり合ったりしながら、自分なりの価値基準を作っていくのだろう。

今回は、二つの園の保育形態の違いから思ったことをとりとめもなく書いてきた。他にも色々な形態、方法をとる園があるとは思いますが、大人の価値基準をそのまま子どもにおしつけるのではなく、子ども自身の色々の感情を素直に現すことのできる、そんな余裕のある教育の場

を用意してあげたい、と思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

